

訓点文

一狐裘三十年

自桓公八世至景公。有晏子者、事之。名嬰、字平仲。以節儉力行。重於齊。一狐裘三十年、豚肩

不掩豆。齊國之士、待以舉火者、七十餘家。
晏子出。其御之妻、從門間窺、其夫擁大蓋、策駟馬、意氣揚揚、自得。既而歸。妻請去。曰、「晏子身相齊國、名顯諸侯。觀其志、嘗有以自下。子為人僕御、自以為足。妾是以求去也。」御者乃自抑損。晏子怪而問之。以實對。薦為大夫。

書き下し文

一狐裘三十年

桓公より八世にして景公に至る。晏子といふ者有り、之に事ふ。名は嬰、字は平仲。節儉力行を以って齊に重んぜらる。一狐裘三十年、豚肩、豆を掩はず。齊國之士、待ちて以って火を擧ぐる者、七十餘家あり。

晏子出づ。其の御之妻、門間より窺へば、其の夫、大蓋を擁し、駟馬を策ち、意氣揚揚として自得す。既にして歸る。妻去らんことを請ひて曰はく、「晏子は身齊國に相として、名諸侯に顯はる。其の志を觀るに、嘗に以って自ら下ること有り。子は人の僕御と為りて、自ら以って足れりと為す。妾是を以って去らんことを求むる也と。御者乃ち自ら抑損す。晏子怪みて之を問ふ。實を以って對ふ。薦めて大夫と為せり。」

辛島驍、多久弘一 共著「新十八史略詳解」(改訂二十九版)、

明治書院(一九九五) 齊(三) 一狐裘三十年より引用。一部振りがな
等変更。